

開発体制下のインドネシアにおける新中間層の台頭と国民統合

倉 沢 愛 子*

Emergence of a New Middle Class and National Integration under the Development Regime of Indonesia

Aiko KURASAWA*

It is largely agreed that a considerable number of middle class people have emerged in Indonesia as the result of rapid economic development under the Suharto regime. This new middle class can be roughly defined as having monthly income of one to several million Rupiahs (one US dollar is approximately 2,250 Rupiahs), being professionals, business executives, bureaucrats, and high-ranking army officers in profession, and having high education equivalent to academy or university. Most of them share more or less the same way of thinking, behaviour pattern, values and life style.

For example, they enjoy a wide range of access to information, having portable telephones, fax machines, parabolas, a wide choice of printed media, and newly established private TV stations. Second, they tend to live in a new, modern, Western-style housing complex or a condominium built in Western style. Third, their diet is wide, consisting of Western, Japanese, Korean, Thai and other foreign cooking including various fast foods. Fourth, they value education and spend lots of money on it. Fifth, they enjoy shopping at very gorgeous and expensive shopping centers that are emerging in various parts of Jakarta. Sixth, they are very conscious of maintaining prestige ("genshi"), which they express by wearing expensive suits, riding in expensive cars, organizing extravagant parties, etc. Seventh, they are very anxious to keep healthy and spend money on membership fees for prestigious sports clubs and highly equipped medical centers. Eighth, they have frequent contact with overseas. In short we can conclude that their culture is extremely extravagant and exposed to foreign influence.

This group of people pay relatively little attention to politics and it is very doubtful that they can be an "agent of change" towards democratization, because they are the very beneficiaries of development policy and are still very dependent on the regime. Facing the emergence of such a social group, government are anxious to control and guide them in such a direction that they should not lose discipline and identity as Indonesians and as Moslems (in most cases). Pancasila Moral Education and Islamization of the middle class are considered very important in this context.

はじめに

独立 50 周年記念行事の余韻の残った 1995 年 10 月, ジャカルタ市のスナヤン国立競技場の

* 名古屋大学大学院国際開発研究科; Graduate School of International Development, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-01, Japan

一角に巨大なショッピング・センター「プラザ・スナヤン」が誕生した。スカルノが国民統合のシンボルとして1962年にアジア競技大会の開催のために、周辺のカンボン住民を立ち退かせて建設した競技場の一角が、開発の恩恵を受けて懐の膨れ上がった一部の特権的市民の消費の場へと変身したのである。

今ジャカルタには、このようなショッピング・センターが多数ある。いずれも「モール」とか「プラザ」といった名称を冠している。スハルト政権の初期の頃にも、伝統的なパサルを中心とし、その周辺に、小さな小売店舗が入居する二階建ての回廊式の建物を併設したショッピング・センターはあった。ところが、1970年代末に登場し、1980年代の中頃から急増した、この「モール」や「プラザ」は、まったく質的に違うものである。その多くは、デパートあるいはスーパー・マーケットを中心に、映画館、レストラン街、ゲーム・センターなどを備えた巨大な施設で、家族連れや若いカップルのレクリエーション・センターとしての機能を果たしている。

そういった形態上の相違にも増して、そこに集う人々の層がすっかり違ってきている。壁やドアで外界から区切られていない伝統的なパサルの空間と違って、この全館冷房付きの建物には、当然のことながら正面と後ろに密閉式のドアがあり、これが入場者を外の空間から遮っている。すなわち、そこは町の誰もが入れる空間ではなく、入口に立っているサトパム（警備員）が、しかるべき身なりをして、しかるべき金額の入った財布やクレジットカードを持たない人々を心理的に排除している。「場違い」ということを自ら悟らしめるような威圧感がそこにはある。こうして一部の特権的階層だけが、思う存分にその消費欲を満たす場となっているのである。

「特権的階級」なるものは、この国でもいつの時代にも存在した。しかし、「モール」や「プラザ」に出入りを“許される”のは、伝統的なエリート層に加えて、近年台頭した新しい社会層の人たちである。すなわち開発政策の恩恵を受けて、1970年代から出現し、1980年代中頃以降急増した「にわか金持ち」たちであり、最近学界やメディアの世界で新興ミドル・クラス、あるいはインドネシア語で「クラス・ムンガ」(kelas menengah)として注目を集めているひとたちである。いまここに筆者はこの用語を「新中間層」と訳すことにする。筆者が「中産階級」という表現を用いないのは、後述するように、このグループの人々は、生産形態や生産手段の所有の有無といったような伝統的な「階級」概念に基づいた分類とはまったく別のところから出てきたものであり、しかも「階級」というよりは、境目の曖昧な「階層」という社会的・文化的分類概念を当てはめたほうが適切であると考えためである。現にインドネシアでも、「ラピサン・ムンガ」(lapisan menengah)、つまり中間層や「クロンボック・ムンガ(kelompok menengah)」ということばが使われる場合もある。また日本の研究や翻訳でも「中間層」という用語の方が一般的である [中村 1994；アジア経済研究所 1985；浅見 1995]。

インドネシアの新中間層に関しては、欧米諸国やインドネシア国内ではすでに多くの研究が行われている。早くは1984年2月、3月にインドネシアの社会科学評論雑誌『プリスマ』(*Prisma*)が中間層に関する特集を出し、この主要部分は翌年アジア経済研究所によって所内史料として翻訳されている。さらにその翌年の1986年に、オーストラリアのモナシュ大学東南アジア研究センターが“Politics of Middle Class Indonesia”と題するシンポジウムを開催し、のちに1990年にこの成果が同名の単行本として刊行された。この間、日刊紙『コンパス』(*Kompas*)が専門職につく70人の若年層を対象にアンケート調査を行い、1986年5月11日付けの同紙で発表している(以下本稿では「コンパスの調査」と称する)。さらに、月刊誌『エディトール』(*Editor*)は1990年8月に「ヤング・エグゼキュティブ」75名に対して独自にアンケート調査を実施し、その結果を発表している。(以下本稿では「エディトールの調査」と称する。「ヤング・エグゼキュティブ」は新中間層と同意ではないが、その一翼を担うものとして本稿で参照した。)ここ二、三年の間に、さらに多くの論文や単行本で中間層の問題が取り扱われている(とりわけ [Soegen 1994; Wahjoetomo 1995; Zulkarnain *et al.* 1993: *Forum Keadilan* April 1996] など)。しかし日本では、インドネシア中間層の研究は正面からとりあげられることは少なかった。

本稿は、これまでの諸研究の成果を踏まえ、筆者の過去数年間のインドネシアにおける生活体験の中で見たもの、新中間層と想定される人々との会話の中から読み取ったものを中心に、可能な限りのデータで確認しながら、新中間層とは何か、彼らの特徴付ける要素は何かを分析したい。質問票を使用しての新中間層へのシステムティックな聞き取り調査を現在実施中であるが、その成果はまだ本稿では活用するにいたらなかった。従って、緻密な実証的調査を踏まえたものではなく、その意味でプレリミナリーなものであることをまずお断りしておきたい。

本稿はまず、Iにおいてこの「新中間層」を作りだした政治的・経済的背景を概観すると共に、「新中間層」の全般特徴を描きだす作業をする。そしてIIでは「新中間層」のもっとも重要な特性と思われる消費型のライフ・スタイルと価値観に焦点を置き、観察の結果を報告する。さらに、IIIでは、そういった彼らの価値観や文化が、現体制にとってどのような意味を持つのか、とりわけ、この国のもっとも重要な政治的関心事である国民統合や民主化の問題との関連でどのような意味をもつのかを考察する。

I 開発と新中間層

(1) 新中間層出現の背景

これまでの先行研究において、いずれの研究者も、インドネシアの新中間層が、1960年代後半以降新体制（Orde Baru）下で進められた開発政策の受益者として出現してきた¹⁾という点では一致している。開発政策の進展に伴って、外国資本と結びついた形での起業による産業の多様化、都市化、教育の拡大、雇用の機会増加がみられた結果、収入規模の拡大、職種の多様化、購買力の向上がみられるようになった。かつてギアツは、サントリの自営商工業者の中に企業家精神を見だし、彼らが華人に対抗しうる中間層へと発展する可能性を指摘していたが、現在のインドネシアの新中間層は実はそれとは異なるところから出てきた。つまり、開発の結果出てきた新中間層は、家産的な政治システムの中で、政治権力や官僚層と民間セクターが結びついた形が出てきたものであり、制度的に国家によってつくられたものであると言っても過言ではない。より具体的に言えば、許認可権を政府が握り、ライセンスやコンセッションの獲得が、コネや特別のチャンネルを通じてのみ可能であるという構造の中で、官僚や軍の高級将校と接点をもった人々が上昇の機会を得たのである。つまり民間セクターの育成が国家により「選択的に」行われてきたのである。従って、この開発の副産物としての新中間層は、国家や官僚機構からの独立性が極めて弱い。

それでも近年（1980年代中頃以降）は中間層に占める民間セクターの割合がこれまでになく高まりつつある。それは、1983年以降石油価格が下落して、それまで石油収入に歳入の多くを依存していたこの国の開発政策が大きな路線変更を迫られたことによる。すなわち、外国からの民間投資をさらに奨励して、民間セクターを強化し、プルトミナやクラカトウ製鉄のような国営企業依存から脱却することが必要になったのである。すでに1980年から“Keppres 10”によって新しいプリブミ企業の育成を目指してはいたが、このプロセスはその後いっそう促進された。そして民間企業育成のために、経済上の規制緩和政策が取られたのである。²⁾

- 1) マッキーは、中間層の出現と結びついた要因として、a. 都市化、b. 教育の拡大、c. 製造業の拡大と雇用の機会増加、d. 豪華な住居、e. 商業・鉱業活動というビジネスからの収入、f. 投資による収入、g. 政府による安いクレジット、の7つを挙げているが、このうちdからgの要因が整い始めたのはようやく新体制下であることを強調している [Mackie 1990: 123-130]。
- 2) 銀行業務の規制緩和により、多くの民間銀行が設立され、これが特定の企業グループと結びついて成長した。また外資の導入に際してはこれまで投資が許可される分野や、合併における外資のシェアが制限されていたのが、大幅に緩和された。金融の自由化と民間企業の振興はやがて、株の公開により資本を外部から求めるというビジネス慣行をこの国にも持ち込み、株式市場の出現を促した。1995年にはスディルマン通りの南部に新しいジャカルタ証券取引所のビルが完成し、自動取引機が導入されて取引が促進されるようになっていく。また1996年1月1日から資本市場法が施行されて、構造上は本格的な資本主義社会へと踏み出した。

(2) 中間層の特色

ジャカルタの新中間層は、そのように急激に成長してきた民間セクターに収入の基盤を置く者たちの比重が大きくなってきている。近代的商慣習と市場メカニズムに依存したセクターに生きる人々ということができよう。実はいまなおその多くを、華人系の住民が占めており、ロビソンは、このような状況を、中間層の大半をユダヤ人が占めていた第2次世界大戦以前のポーランドに似ている、としている [Robison 1995:35]。しかし、近年はプリブミ実業家の台頭も見られるようになった。さらに新中間層を彩るものとしては弁護士、公証人、医師、技術者、大学教授、教師、経営コンサルタント、会計士、ジャーナリストなどの専門職があるが、これらはプリブミが主流となっている。³⁾ さらにこれに加えて、従来からのエリートである大学卒の高級官僚(中村 [1994:278] によれば1991年の統計では官吏全体の17%)、軍の高級将校なども含まれる。全体としては給与所得者と自営業者の双方が中心になっている。

新中間層は単に職種のみならず、収入規模という点からも定義づける必要があると考える。民間企業、とりわけ、外資との合弁企業においては、高等教育を受けたマネージャーや幹部クラスの待遇は、月収100万ルピア(420 USドル。以下ドルはすべてUSドル)から数百万ルピアにも上っている。逆に単なるサラリーマン層であっても世帯の合算で約200万ルピアの収入規模のある人々は経済的には中間層としての要因を満たしていると考えて良いだろう。ただし官僚や軍人の場合は給与の額面は低くても、さまざまな便宜を供与されており、これも収入金額に換算する必要があるだろう。

ちなみに前述の1986年の「コンパスの調査」では、月収100万から200万ルピアが45.3%、200万から300万ルピアが12.5%であった。これは1986年のデータであり、インフレや対ドル・レートの変化を考慮にいれると、当時(1ドル=約800ルピア)の100万ルピアは現在対ドル換算でいえば約600万ルピアに相当する。また「ヤング・エグゼクティブ」75名を対称とした「エディトールの調査」によれば月収100-290万ルピアが50.7%、300-590万が26.76%を占めていた [1990:13-14]。住宅ローンか家賃を払い、自宅と車を持ち、お手伝いを雇い、子供に十分な教育を受けさせることができ、後述するような消費型の生活をエンジョイするためには、どうしても200万ルピア、すなわち約1,000ドルが最低線と思われる。ちなみに1995年にはインドネシアの一人当たり年間国民総生産(GDP)は、全国平均で1,040ドル(1995年)であるが [The World in 1996 1996:95]、ジャカルタでは3,019ドル(1カ月251ド

3) 1990年の国勢調査によれば、professional and technical および manager and administrator というカテゴリーの人は3.9%であった [Robison 1996:84]。なお、Howard Dick (Howard Dick) は、専門職、経営者層、ホワイトカラーのサラリーマンらを中心とする層を想定している [Dick 1985]。Daniel Lev は、ミドル・グループという用語を使い、このインドネシアの中間グループの中核は経営者的、商業的、金融関係者や専門職の人々だと定義づけている [Daniel Lev 1990a]。

ル程度) (*Kompas*, 7 Okt. 1995) にも達しているという。一世帯の人数が五人とすると、世帯あたりの総生産は月額 1,257 ドル程度になる。これは先程想定したジャカルタの中間層の収入(月額約 1,000 ドル) 規模とほぼ一致する。こうしてみても来ると中間層といってもそれは社会全体から見ると決して、文字通り「中間」に位置する「平均的」市民などではなく、上部の数パーセントに入る層であることを認識しないと分かりにくい。

彼らのほとんどは、学歴の面で見ると、大学・短大で教育を受けるか、あるいは高校卒業後少なくとも何らかの専門学校を卒業している。前述の「コンパスの調査」では、20% が短大卒 (*sarjana muda*), 64% が大学卒 (*sarjana*), 7.3% が修士号取得者であった。ただし、「教育」が一般に考えられるほど決定的な要因であるのかどうかは分からない。それは必要条件ではあっただろうが、必ずしも十分条件ではなかった。「コンパスの調査」では現在のキャリアを決定づけた要因としては、コネクション (22.9%) や能力 (37.7%) を上げたものが多く、教育だけでは不足であることを物語っている。

さらに、この新中間層は年齢的に見て、比較的若い層に多い。新体制初期の高度成長期に青年時代を送った人々である。つまり現在 30 歳代から 40 歳代前半にかけてが主力ではないかと思われる。ちなみに、「エディトールの調査」は、対象者を 25-45 歳までと限定している。さらに最近 *Yuppies* (*young, urban professionals*) ということばがよく聞かれるが、これも新中間層と二重写しになった社会集団といえるだろう。

次に、出自という点では、高学歴を得られたという事実から推察して、官吏や軍人など従来からの中間層(これは伝統社会のプリアイ階層にほぼ当たる) の子弟が中核をなしていると思われる。「エディトールの調査」では、75 人のヤング・エグゼクティブの 66.7% が公務員の子弟であった。

それでは、そのような新中間層と考えられる人々は、人数としてはどのくらいいるのであろうか。クラウチは、その職種から推定して、人口の 5%、ほぼ 160 万世帯が中間層であるという数字を出している。そしてこの数字は人口の 40% 以上を占めるシンガポールや、13% を占めるタイと比較して相対的に少ないと強調している。なお、この 160 万世帯のうち 60 万世帯は華人と推定され、残りの約 100 万世帯がプリブミの中間層と推定している。またマッキーは、人口の約 10% と推定している [Mackie 1990: 102-104]。

要するに、新中間層の定義は極めて曖昧かつ流動的なものである。彼らは上にあげた出自、学歴、職業、収入などの条件をすべて満たしているわけではなく、あるいはまたどれかひとつ満たしていればそれで良いというものでもなく、それらの要素のうちのいくつかを満たしており、それに加えていくつかの特徴をもっている。たとえば、強力なコネクションやネットワークをもち、さまざまなリソース(金、情報、知識) へのアクセスをもっている。そして、職業選択や、収入源の多様性などにおいて比較的多くの選択肢と柔軟性をもっている。

さらに新中間層の定義を最後に決定づけるものは、彼らの価値観、意識、ライフ・スタイル、行動様式といったような主観的ファクターではないかと思う。つまり彼らが、現在身につけているメンタリティーや文化の共通性といったものが、彼らを定義づけるうえでかなり大きな意味をもつのではないかと思うのである。⁴⁾ それではインドネシアの新中間層を特徴づけているライフ・スタイルや価値観、つまり中間層文化ともいうべきものは、どのようなものなのであろうか。その全体像を描くのは困難であるが、それがもっている特徴的な要素のいくつかは明確な形をとって現れている。以下、いくつかのシンボリックな指標をとりながら中間層文化の一片を考察する。

II 新中間層の属性

(1) 情報へのアクセス

新中間層の消費文化を特色づける第一の特徴は、情報への幅広いアクセスをもっているということであり、それを表象するシンボルは、「携帯電話」「ファックス」「パラボラ・アンテナ」などである。郊外の新興住宅地においては電話回線の整備が追いつかない現状であり、それを補うという意味で携帯電話が普及している面もあるが、多くはすでに家庭や事務所に電話をもった上でこれを所有している。携帯電話が必要なほど時間に追われる人もいれば、一種のステータス・シンボルのような形で携帯してホテルやレストランのロビーで声高に通話をする人などもいる。

ファックスもすっかりインドネシアの都市社会に定着しているが、自宅でその備えがない人々のために、ファックス送受信などを代行する業者、ワルン・テレコミュニケーション略して「ワルテル」が街角のいたるところに目につく。

テレビの普及度は1990年の全国平均でさえ16.3人に一台であったが〔Robison and Goodman 1996:78〕、現在ではもっと多く、日本の家電メーカー関係者の推定によれば40%の世帯がテレビを所有しているという。首都圏においては、大衆を含めた多くの人々がそれへのアクセスをもっている。しかし新中間層を色どるものは、それを越えた新しい機器へのアクセスで、アメリカやオーストラリア、マレーシア、香港、日本などからの情報や、娯楽性の強い番組をより好む人々のために衛星放送用のパラボラ・アンテナが普及している。取り付けには約100万ルピアを要する。このアンテナは、直径3メートルもある大きなもので、これを屋根の上に乗せていると、誰の目にも目立つ、富の象徴なのである。

4) 中間層とは、ライフ・スタイルや価値観において識別されるものであるという指摘はハワード・ディックもしている〔Dick 1985:74〕。

ところで、情報の供給という側から見れば、インドネシアのコミュニケーション状況はここ数年、より高度で広範な情報を求める中間層のニーズを十分満たすようなものになってきた。一つは、民間放送の許可によるテレビの多局化である。インドネシアでは長い間テレビ放送は国営 TVRI 局の独占であったが、大統領の長男、バンバン・トリハトモジョが 1989 年に RCTI 局の開設許可を取ったのを皮切りに、大統領の異母弟のストウィカトモが 1990 年に SCTV を、さらに 1991 年に長女シティ・ルクマナが教育放送 (TPI) の開設許可をとった。また、1993 年にはプリブミ実業家のバクリー財閥が ANteve 局を [内藤 1994: 49], 1995 年には華人実業家のスドモ・サリムが Indosiar 局を開局し、テレビはいっきょに楽しくなった。また最新の情報によれば、ピーター・ゴンタやバンバン・トリハトモジョらが所有する Indovision Group がアメリカの大手テレビ会社 MGM (Metro Gold Wayne Meiyer) と合併で放送ビジネスを設立することで合意したという (*Bisnis Indonesia*, 26 Feb. 1996)。

さらに活字メディアも、単行本出版こそ他のアジア諸国に比べて少ないが [Robison 1996: 78], 現在首都圏で発売されている日刊紙は 20 紙におよび [Indonesia, Deppen 1995: 39-45], さらに、週刊誌や月刊誌が乱立している。中には「ポスト・コタ」のような比較的低学歴者を対象とするものもあるが、新聞の多くがオピニオン紙であることを考えると、こういった現象は、その主たる消費者である中間層の増加と彼らの読書嗜好の多様化を意味している。中でも特徴的なのは女性や青少年、さらに子供を対象とした雑誌の増加で、これは社会の“ゆとり”を示す一つのメルクマールであろう。⁵⁾ また、最近の興味深い傾向としては、イスラーム関係の書物の出版件数も多く、それらを扱う専門書店や専門コーナーが至るところで目につくが、これは後に示すように、イスラーム中間層の台頭を示すものである。

(2) 欧米風住宅とコンドミニウム

第二の特色は、大規模な住宅開発とそれに伴う住環境の欧米化で、そのシンボルは、「リアル・エステート」(本来「不動産」を意味する英語だが、インドネシアでは綺麗に区画整理された新興住宅を指す)と「コンドミニウム」である。日本の高度成長期を思い出させるように、郊外のあちこちで大規模な住宅開発が行われ、分譲住宅の販売が行われている。また、職住接近や、高度な安全性を望む人々のためには、市内中心地でコンドミニウムが分譲されている。その多くは、カンボンと呼ばれる古くからの庶民の居住地を、区画整理などの口実で立ち退きさせ、そのあとにデベロッパーによって建てられたものである。1985 年には 753 戸しかなかった

5) 子供を対象とした雑誌として *Bobo*, *Si Kuncung*, *Tom-Tom*, *Kawanku*, 若者を対象とした雑誌としては *Hai*, *Gadis*, *Anita Cemerlang*, 女性を対象とした雑誌 (家庭雑誌を含む) としては、*Femina*, *Nova*, *Pasaraya*, *Keluarga*, *Ayah Benda*, *Kartini*, *Sarinah*, *Serasi*, *Suasana* などがある。

たコンドミニウムが、1992年には8,427戸になり [Robison 1996:80]、今や供給過剰気味でさえある。

このような新興住宅は、こぎれいな欧米風の作りで、多くがシステムキッチンや温水の出るシャワー設備を備えている。しかも、天井は低いうえ、ガラス張りが多くて太陽光線を遮りにくく、またエアコンの使用を前提とした密閉型の作りで、風通しは良くないものが多い。ジャカルタの新中間層住環境は大きく変わりつつあるのである。その一方で、最近デベロッパーたちが好んで使うキャッチ・フレーズは、「自然への回帰 (Back to Nature)」である。これは必ずしも、伝統文化への回帰ではなく、近代的設備と快適さを備えた住居を郊外の空気の良い高台に作るというもので、その背後には、以下に述べるように、「健康管理」という、これまた中間層的な発想がある。従って、こういった分譲住宅には、テニス・コート、プールなどのスポーツ施設と並んで、ジョギング・コースが用意されているものが少なくない。

居住する人々がもう一つ求める価値は「プライバシー」である。ディックは、カンボンでは家々のドアは常に開かれておりいつでも近所の者が出入りでき、また誰が何を所有しているかもみな知っているが、多少とも裕福な者は、だんだんカンボンを抜け出して、表通りのインドネシアでドアを閉ざした生活へと移っていく、と述べている [Dick 1985:75-76]。このプライバシーを重視する傾向は、最近の中間層に広く見られる。こういった分譲住宅の形態が、核家族用のコンパクトな作りになりつつあり、親戚のものが自由に出入りし、泊まっていくという伝統的なパターンは薄れつつある。他者を排除するという傾向がさらに極端になった形が、「リアル・エステート」や「コンドミニウム」の入口で見られる嚴重な警戒であろう。そこでは、その敷地全体が外界から塀などで隔てられている上、関係者以外の立ち入りを拒絶するために警備員が入口で誰何する。あるいは、施錠された門を磁気カードを持つ者だけが開閉できるという仕組みになっている。これはもちろん単にプライバシーを守るだけでなく、広い意味での「セキュリティー」(単なる「治安」だけでなく、諸権利、既得権益に対する防御や保証全体を意味する) というものに対する中間層の意識の強化が反映されているのであろう。

分譲住宅は、ますますジャカルタから離れ、一つのデベロッパーが開発する総面積は巨大化し、今や「ニュー・タウン」的なものも出現している。たとえば、東京の「多摩ニュータウン」を参考にしてデザインされたというタングラン県下の「ブミ・スルボン・ダメイ (Bumi Serpong Damai)」は、8,700ヘクタールの土地に、ショッピング・センターなども備え自立した一つの「町」の建設をねらったものである [Yohanes Sumadya Widada 1993:18-19]。

分譲住宅にせよ、コンドミニウムにせよ、価格は1億ルピア(5万ドル)から数億ルピアにわたっている。たとえばジャカルタの西方に隣接するタングラン県のチポンド村に作られたモデルンランド分譲地では、180平米の土地に85平米の住宅で1億ルピア、650平米の土地に400平米の建物で3億2,200万ルピアであった [Bekti Nugroho 1993:23]。

1億ルピアの家は、たとえば月1,000ドルの収入規模なら50カ月分、約4年分の年収に相当する価格であるから、日本の首都圏での集合住宅購入とほぼ同程度の負担である。しかし、銀行が、住宅ローン——20%を越える金利で決して低利とはいえないのだが——を積極的に貸付けるようになり、購買意欲を強くそそっている。テレビのコマーシャル、新聞広告、さらには折り込み広告を通じてマイ・ホームへの誘いは氾濫し、即売会、モデル・ハウスなど、日本の住宅販売と同じ商法がとられている。

このような高級分譲住宅の建設に際しては、政府から1:3:6方式といわれる足かせがはめられている。それは、どのデベロッパーも、一つに分譲住宅内で、高級住宅1、中級住宅3、低所得者用住宅6の割合で建設しなければならないという規則である [Natsir Kongah 1993: 21]。高級・中級住宅販売で得た利益で、あまり利益のない低所得者用住宅を同時に建設させる、というのが政府の狙いであるが、これがなかなかうまくいっていない。もちろんこの比率は販売個数であり、実際に高級住宅一軒で、低所得者住宅20軒分の土地を使ったりしているため、住居面積でいえば、圧倒的に高級・中級住宅の占める部分が多くなっている。

(3) 食生活

第三の特色は食生活の多様化と外食産業の発達で、そのシンボルは、「ハンバーガー」と「ホカホカ・ベントー」である。かつてインドネシア人はオランダ人のことを「バウ・ケジュ」(チーズ臭い)とあって敬遠した。比較的長くヨーロッパの支配を受けた割には、この国にはヨーロッパの食文化はあまり定着していなかったのである。しかし現在オランダ経由ではなく、アメリカ経由で新たな欧米の食文化が入ってきた。「米食以外は食事にあらず」という文化の中に育った人々が、好んでマクドナルドやケンタッキー・フライド・チキンやピザ・ハットに集う。こういった食物は、日本や欧米では「ファースト・フード」と称して、味はともかくも「忙しい時に時間の節約のために」食べるには便利なものとして受け入れられているのだが、ジャカルタでは、中間層が家族連れで日曜日の夕方足を向ける場所であったり、恋人たちのデートの場になったりしている。⁶⁾一方、このような欧米の味だけでなく、日本の「ホカホカ・ベントー」も多少インドネシア風に味をアレンジして人気を呼んでいるし、「スシ」や「サシミ」「牛どん」「オムライス」も、ショッピング・モールの食堂街にブースを出して人気を呼んでいる。

もちろん、ファミリー・レストランやファースト・フードのイメージを越えたもう少し本格的なレストランや、欧米や日本型の喫茶店も急激に増加している。運輸・通信・観光省ジャカ

6) この背後には、核家族においては家庭生活が子供主導になってきていることや、またその子供たちに対するテレビのコマーシャルの影響の大きさなどが考えられる。

ルタ事務所の調査によれば、ジャカルタ市における各種レストラン（その定義は明らかではないが）数は次の通りである。

	1991	1992	1993	1991年との比較
インドネシア料理	562	652	707	25% 増
ヨーロッパ料理	252	321	348	38% 増
日本・韓国料理	120	123	133	11% 増
中国料理	164	186	201	23% 増
その他	8	8	10	20% 増
計	1,109	1,290	1,399	26% 増

出所：“Mengejar Kelas Menengah dan Atas.” 「中間層と上流階層を追いかけて」

Warta Ekonomi, 9 Jan. 1995, p 2.

わずか二年間に、レストランの総数が26%増えていること、しかもその約半数が外国料理であるということは、極めて保守的であったインドネシア人の味覚を考えると驚異である。ちなみに、前述の「コンパスの調査」によれば、好みのレストランとしてヨーロッパ料理店をあげた者が35%、インドネシア料理店37.5%、中華料理店20%、日本・韓国料理店7.5%であった。筆者が調査した中には、従業員275名を数える巨大なレストランもあり、ここは666ある座席が夕食時には家族連れで、ほぼ連日満席になっていた。

こういった外食産業の発達には、一つにはサラリーマンの就業形態が変わって、夕方までの勤務になったこと、そして交通渋滞も激しいため、都心で働く人々は家に昼食を取りに帰るといった習慣がなくなったことにもよる。首都圏で約300万人の人々がいわゆる勤労者階層で、彼らのほぼ全員が昼食を外でとっているという（*Warta Ekonomi*, 9 Jan. 1995）。

さらに、経済的に余裕をもった階層が増え、家族の楽しみとして外食するケースも増えているのであろう。また、エグゼクティブ・クラスの人々が商談や接待に使うことも多くなったと思われる。ビジネスの会食といえば、昼食、夕食がメインであったが、近頃は朝食をもそれにあてるエグゼクティブが現れてきているという。この傾向は、1992年にジャカルタ市の目抜き通りでスリー・イン・ワン政策が施行され、午前10時以前は三人以上乗せた車でないと乗り入れができないという規則ができて以来、増えたという。つまり、「スリー・イン・ワン」にひっかからない場所で10時までビジネスのための会食をして時間を潰そうというものである [Sri Pudyastuti 1992: 91]。

(4) 教育産業

さて、第四の特色は、大人も子供も教育への投資にはお金を惜しまないという傾向で、シンボルは「レス」(les, レッソンの意)と「クルスス」(kurusus, コースの意)である。その結果教育産業が急速に発達している。子供たちは、日本と同じように、学校から帰ると塾やお稽古ごとに忙しい。数年前、当初は日本人の子弟向けに進出した日本の公文教室も、インドネシア人向け教材を作成し、生徒の幅を拡大している。さらに、学校教育においても、中間層以上の子弟が通う学校と庶民の子弟が通う学校は明確に分かれており、親たちは何とかして有名私立校に子供を入れるのに必死になる。タラカニタ (Tarakanita)、カネシウス (Kanesius) など昔からあるカトリック系の名門校に加えて、近年勢力を拡張してきたイスラム系のアル・アズハル (Al Azhar) などの競争率は非常に高い。このような幼児からのエリート教育は、最近タングラン県下のリッポー・ビレッジに開校したプリタ・ハラパン校や、ビンタロ・ジャヤ・エステートのグローバル・ジャヤ校において頂点に達した感がある。これらの学校は、コングロメラット (前者はリッポー・グループ、後者はチプトラ・グループ) が開発したニュータウンの中に建設されたもので、インドネシアのカリキュラムに従ってはいるものの、教育の多くの部分が英語で行われ、国際競争力を身につけたエリートの養成を目指している。

教育に投資するのは子供のためだけではない。社会人も働きながら、MBA 取得を目指したコース (1993 年には 100 校余りで、既存の大学内に開校されているものが多い) や、英語、コンピューター等のコースに通う者が多い。

(5) ショッピングとクレジット・カード

第五の特色は、かなり派手な消費生活で、これは本稿の冒頭に上げた「ショッピング・モール」「プラザ」そして消費を支える「クレジット・カード」といったシンボルに象徴される。

1990 年にジャカルタ市の中心街タムリン通りに、スハルト大統領の長男バンバンが代表者となっているビマンタラ・グループがグランド・ハイヤットホテルを建設し、それに隣接して「プラザ・インドネシア」が作られた。そして、小売業に対しては外資の参入を許さないというこの国の従来の方針を突き破ってその中に「そごう」が進出した。(法的には技術提携であって合併ではないが、商標は日本の「そごう」をそのまま使用している。) そのオープニングに際して、責任者はメディアからの質問に答えて、「われわれは社会の上部5%の客層を主たる対象としており、それで十分に採算がとれる」と述べた。その後6年を経た現在「そごう」は倒産するどころか、それに引き続いて、「やおはん」「西武」が進出し、上部5%以上の客を引き込んでいる。⁷⁾

7) こういった大型のショッピング・センターの他に近年ジャカルタで目につくもう一つの現象は、各種の食料品店の専門店化である。一頃前から自家製のパンを売るベーカリーの開店が目立って

これらの日系デパートでの商品価格は日本国内とほぼ同じレベルである。一人当たり GDP が 40 倍である (*The World in 1996* によれば日本の 1995 年度の GDP は 40,500 US ドル) 日本の価格と同じであるということは、インドネシアの国民にとっては「異常に高い」ということになる。現実に日本人と同じレベルの年間所得を得ている人々のパーセンテージはわずかしかならないにもかかわらず、それを越える数の人々がここで買い物をしている。ということは、収入レベルに比して高い額の出費をするインドネシア人が多いということである。

一日当たり来客数でもプラザ・インドネシアが 17,000 人、ポンドック・インダ・モールが平日 25,000 人、休日が 4 万人、と非常に大きな数である。また贅沢品の売上高は 1984 年には 80 万ドルであったのが、1994 年には 8 億 600 万ドルへと飛躍的に伸びていることからこの消費傾向は明らかである (*Kompas*, 26 Des. 1995)。

こういった人々の消費欲を満たすのに貢献しているのがクレジット・カードである。以前はこの国でクレジット・カードを使用する人といえば、大部分が外国からの訪問者であったが、ジャカルタのあるレストランで、1994 年の一定期間中にアンケート調査をしたところ、カードでレストランの代金を支払った者のうち 450 人が香港、239 人がシンガポール、128 人がイギリス、118 人がオーストラリアからの客で、残りの 4,088 人は国内の客であったという (*Warta Ekonomi*, 9 Jan. 1995)。金融関係者によれば年間所得が 1,000 万ルピアに満たない者までクレジットカードを持っているといわれ、このような氾濫状況に鑑み最近中央銀行はカード保有の条件を強化することを検討しているといわれる (*Bisnis Indonesia*, 27 Feb. 1996)。

(6) ゲンシ

六つ目の特色は、必要以上に(と思われるほどの)見栄をはり、その見栄が作り出す豪華な雰囲気、その地位と豊かさを社会的に認知させ、さらに大きな社会的信頼とビジネス上の進歩を勝ち得ていくという社会風潮で、このシンボル・ワードは「ゲンシ gensi (ええかっこしい)」である。

それは例えば、時計、スーツ、鞆など身につけるものや、ビジネスに駆けつける際に乗っていく乗物の種類、飼育しているペットの種類など、日常的なアイテムによってしばしば表象される。そのステイタス相応の身なりというものがあり、たとえば、1970 年代には中間層の中核たる役人層のシンボルでさえあったサファリー・スーツは、少なくとも若いビジネスマンや専門職の人々の間では姿を消し、スーツとネクタイ姿にとって代わられた。オフィスの冷房化が進んだこともその一因であるが、同時に中間層の思考の変化をも表現している。こういった高級志向は、必ずしも、見せびらかしたいからというのではなく、この国ではそれなりに相応し

ゝいたが、最近輸入果物専門店が開店して話題を呼んでいる。

い身なりをしていないと信用にかかわり、商談にも差し支えるという傾向が強いからである [Sri Pudyastuti 1992: 91]。

そういった中で、筆者が最近の新しい現象として関心を抱いたのは、子供の誕生パーティーの華やかさである。本来インドネシアには、割礼式その他の通過儀礼を伝統的方法によって祝う習慣はあったが、毎年毎年の誕生日を祝う習慣は、西欧文明がもたらしたものである。以前は誕生日を祝うといっても親しい友人を招いて、母親の手作りの料理やお菓子でもてなすというようなホーム・パーティーであった。それが今やそういったイメージを越えて、大人の社会の「社交」の場のような盛大なパーティーがしばしば開かれる。

広い敷地を持つ家庭は、そのリビング・ルームと庭園を活用してオープン・ハウス式のパーティーを行うが、場合によっては、ホテルやレストランを借り切ったり、あるいは、マクドナルドやケンタッキー・フライド・チキンを借り切ることもある。家庭での場合も会場を借りる場合にも、その進行はすっかりパターン化され、どこに行っても似たりよったりのプログラムで演出されることが多く、ますます派手になる日本の結婚式場の演出を思い出させる。実はその背後には、こうしたパーティーを演出する業者がいて、会場の飾りつけ、道化師の派遣、人形劇、歌、ゲーム、帰る時に来訪者に持たせるお土産のアレンジなどをパッケージで請負うのである。その演出の費用は、予算に応じてさまざまであるが、安くて50万ルピア（250ドル）程度、平均的には200-300万ルピア（いずれも食費は含めず）のものが多くという。こういった業者が登場しはじめたのは1980年代の初めであるが、需要が増えて急成長したのは1990年代に入ってからである。⁸⁾ こういったパーティーには、多くの場合、母親のみならず父親も共に招かれる。従って、これは大人同志の交流の場所にもなっており、こうしていわゆるコネクションとよばれる人間関係形成の場を提供しているのである。

(7) 健康管理

第七の特色は、健康管理に非常に心を配り、金をかけるということで、そのシンボルは「アスレティック・クラブ」と「メディカ・〇〇」である。この国では、以前は見られなかったような肥満児が最近目につくようになった。今やいかにしてお腹を満たすかではなく、いかにして栄養過多を防ぐかに悩む人々が登場してきたのである。それにつれて、主な死因も感染症から心臓病、糖尿病などの老人病へと移りつつある。ジャカルタのあちこちには、最新の機材と人材を整え、「メディカ・〇〇」といった名を冠した高級クリニックが登場し、中間層の平均的月収（200万ルピア）の三分の一ほどの費用がかかる人間ドックも制度化されてきた。健康管理

8) 人形劇師で、子供たちのための余興のプロデューサーとして誕生パーティーの演出を生業としているアグス (Agus) 氏とのインタビュー。(1996年1月4日ジャカルタにて)

のため、あちこちで会員制の高級アスレティック・クラブやスポーツ・クラブが誕生している。スポーツをするということは時間とお金と心理的な余裕が必要であり、その日暮らしの階層にはできないことである。

(8) 海外とのコミュニケーション

八番目の特色は、海外との接触が多いということで、これは「グローバリゼーション」ということばで象徴される。日本でいえば、「国際化」といったような意味なのであろうが、この国ではこのような表現が使われる。留学や研修で先進国へ行った経験があったり、出張したり、親族の誰かが海外に住んでいたりとというような形で海外が身近なところにある人が多くなってきているのである。1986年の「コンパスの調査」によれば、休暇を海外でしばしば（年に一回以上）過ごす人は21.9%、時々過ごす人は37.5%であった。

以上、筆者は中間層の定義をもっぱらその価値観や行動パターン、ライフスタイルによって規定してきたが、そこにみられる傾向を一口でまとめるならば、「消費志向」と「欧米嗜好」である。ディックは、これを「コカコーラ文化」と呼んでいる [Dick 1985:89]。「コンパスの調査」によれば、好みの音楽は何か、という質問に対し、ポップ33.3%、ジャズ22.6%に対し、クロンチョンその他のインドネシア音楽、と答えたものは27.5%しかいなかった。

そしてこの、欧米、特にアメリカ文化の影響は、直接的に入ってきたものの他に、香港やシンガポールでいったん消化され、そのフィルターを通して入ってきているものもある。従って東南アジアの華人文化というようなものの影響も多少受けているのであろう。さらに、まだそれほど強固なものではないにせよ、日本を通じた欧米文化も入ってきている。耐久消費財を初めとして、街角の至るところに目につく消費物資の数々はもちろんのこと、ここ数年の傾向としては、日本のテレビ・ドラマ、アニメーション、漫画本の氾濫もすさまじい [倉沢 1996 参照]。

テレビのコマーシャルや雑誌の広告を通じて、こういった外の文化に絶えずさらされることによって住民の嗜好は徐々に画一化され、意識せぬうちにグローバリゼーションが進んでいるのである。そのような点から見ると東南アジアのどの都市の中間層も類似した性格を持っているということがいえるだろう。つまり開発政策をとっている東南アジアの国々で台頭してきた新中間層の間では、一見国民国家の枠を越えた共通性が多くみられるといえよう。

III 国民統合、民主化、イスラーム回帰

それではこのような社会層の台頭は、この国の今後の方向にどのような影響を与えるのだら

う。また政府はその存在をどのように見なし、どのような対応をとろうとしているのであろうか。

(1) 中間層は政治改革の原動力たりえるのか

中間層の問題は民主化への原動力という観点から語られることが多く、1986年のフィリピンにおけるマルコス打倒、1987年の韓国における全斗煥打倒、1989年の天安門事件などはしばしば中間層の台頭と結び付けて解釈された。とりわけ1992年4月のタイの反政府デモの直後には、ある種の強い期待感をもって語られることが多かった〔浅見 1995〕。

インドネシアの中間層が民主化の原動力たりえるか否か、という問題は、早くから欧米の研究者の関心を集めてきたが、これに対しては賛否両論がある。⁹⁾ 筆者は、インドネシアの中間層は、いまだ政治的・社会的に弱く、民間部門に基礎を置くとはいえ、なおかなりの部分を官僚制に依存しているため、本当の意味で国家から独立してはいないと考える。また彼らの多くは、きわめて政治に無関心であるといわれる。「コンパスの調査」では、新聞のどの欄を読むかという質問に対して政治欄をあげた者はわずか11.3%で、これは、スポーツ欄(19.8%)や犯罪記事(14.1%)よりも少なかった。また「支持政党は?」という質問に対して、68.1%が「特にない」と答えた。

失うべきものをある程度持った新興中間層は、その権益を侵さない範囲でのみ一定程度進歩

9) *Politics of Middle Class Indonesia* の中でもこれに関しては意見が分かれ、ダニエル・レフ(Daniel Lev)は、中間層は国家から独立した民間部門に立脚して、リベラルな性格を持っており、時期がくれば大きな政治勢力になりうるという評価をしている。一方ウィリアム・リドル(William Liddle)は、このようなレフの見解に懐疑的であり、専門職や経営者を主体とする中間層の多くは実はリベラルではなく、国家からの分け前にありつくために喜んで取引をするような人々であるというような厳しい見解を示している。またJ. マッキー(J. Mackie)は、インドネシアの中間層の数を様々な角度から推定し、それは東南アジアの他の国々と比べても相対的に少なく、このことが彼らが現政権に対して政治的抑止力となるのを妨げている、という見解をとっていた。しかしマッキーは最近、民間部門の相対的重要性が高まってきた現在、ビジネス界の一部は、政治過程においても、より大きな発言権を確保するために集団的な利益増進を求める力を発展させていこう、という見解を示している〔Mackie and MacIntyre 1994〕。

しかしながら、リチャード・ロビソン(Richard Robison)は近刊書の中で、1983年と1986年の石油価格低下以来、インドネシアの経済における国家部門の役割が相対的に減じ、民間部門が重要になってきたことを認めながらも、こういった構造的・社会的変化の結果、中間層が国家から独立して支配的な勢力を築くという可能性に関しては悲観的で、彼らは改革のためのリベラルな力となるよりも、独裁国家の片腕として政治的には保守的な立場をとる、と解釈する〔Robison 1996〕。

また1993年にインドネシアで、*Kelas Menengah Digugat*〔中間層は責められている〕(Jakarta: Fikahati Aneska 1993)と題して、主としてインドネシア人ジャーナリストや、政治家たちの執筆による論集が刊行された。ここで中間層は何を「責められている」のかということ、民主化の原動力となりえない現状を責められているのである。

このように全般的には、インドネシアの民間セクターは、構造的に国家への依存度が高く、それ故、中間層はなかなかリベラルな力とはなりえない、という主張が優勢であるように思われる。

的である。たとえば、大統領の長女が経営する PT Mekatama Raya が国営テレビの聴視料取立を代行するという計画に対し反対を唱え、最終的にキャンセルさせたのは中間層の力だと考えられる。また、ジャカルタ市で、「スリー・イン・ワン」交通規制が1992年に施行された時、「これはいかなる条例にも基づいていない」として反対キャンペーンをはり、結局ジャカルタ特別市条例制定に至らしめたのは彼らの力であったといわれる。また、同じく1992年9月から、交通違反に対してこれまでとは桁違いに高い罰金を課すことを求めた新道路交通法を施行しようとしたところ、これも大反対にあって施行が一年延ばされた [Ahmad Soerlawijawa and Ardinan Taufuk 1992: 42-43]。バスなどの公共の交通機関による通勤を促進するために定めたスリー・イン・ワンや、交通違反の取り締まり強化によって一番打撃を受けるのは中間層のマイ・カー族だったからである。

しかし、同じようなケースでも彼らの利害に反しない場合には激しい反対は起こらなかった。たとえば、ジャカルタ市の南方にある避暑地プンチャック峠へ行く道でバスとトラックの通行が禁止になり、また土曜日と日曜日の夕方一定時間は、峠からジャカルタへ戻る方向への一方通行になって、峠へ向かう交通はストップさせられることになったが、これに対しては反対は起こらなかった [loc. cit.]。週末を避暑地で過ごしてジャカルタへ戻る中間層の利害に反しないからである。

アリフ・ブディマン (Arief Budiman) は、一般に中間層は自分が納税者だという意識を持っているので、国家の政策決定に関与する権利があるのではないかと考えているという [ibid.: 42]。同じ中間層でも、知識人やジャーナリストなどの中には、比較的進歩的、時には急進的でさえある者もいる。そして人権、環境問題等に関してそういった人々が中心となって形成された世論が、政府の一方的なごり押しに歯止めをかける役割を果たしたこともないわけではない。たとえば、1994年のマルシナ事件における容疑者の再審決定、¹⁰⁾ クドゥン・オンボ・ダム建設で立ち退かされた住民に対する補償金支払いを最高裁が政府に命じたこと (1995年)、雑誌『テンポ』の発禁処分取消を求める行政裁判所の判決 (1995年)、1994年4月にメダンでの労働者デモを組織したとして逮捕され禁固三年の刑を受けていたムフタル・パクパハンに対する最高裁の無罪判決獲得 (1995年9月) などの背後には政治意識をもった一部の中間層を中心とする世論が大きな影響を与えたと考えられる。

しかし、中間層が体制に対する根本的な批判勢力となるのは難しいと思われる。1992年の選

10) マルシナ事件とは1993年に、東部ジャワのある工場で労働者によるストが続いたある日、リーダーの一人であったマルシナ女史が突然死体で発見されたという事件で、この容疑者として経営者らが逮捕され、裁判の結果有罪が確定していた。ところがその後、この殺人には軍が関与していたという声があがって、再審を請求する動きが高まり、最終的に司法当局はそれを認めたものである。

挙キャンペーン期間中、ジャカルタにおいて野党民主党支持の運動が熱狂的に高まり、多くの民衆を動員した。そしてこれは中間層の力であるというような解釈と、民主化へ向けての希望的観測が一時的に生まれたことがあった。しかし、実はそのキャンペーンに繰り出したのは多くが、下級サラリーマン、運転手、小商店主など生活には多少ゆとりがあるものの、とうてい中間層とは言いがたいような階層の人々が中心であった。そして現実に選挙の結果、中間層を多くかかえたジャカルタでは野党民主党の票は伸びず、ゴルカルの大勝利に終わったのだった。

それはこの国の中間層の多くはいまだ、官僚や軍人であり、また新興の民間企業のマネージャーや幹部職員らも、いまだ、ビジネスの機会や便宜を割り当ててもらったり、操業許可を獲得するに当たって官僚機構や国家への依存度が高いためである。そしてまた、既得権益を守ろうとする自己防衛本能が強いので、彼らが急激に獲得した富の額が多いただけ相対的に保守的であると言えよう。

しかし、ごく最近のインドネシア政治の動きを見ていると、これまで長期に亘ってかなり停滞気味であった政治の世界に新しい息吹が感じられるようになった。すなわち、独立50周年記念行事を華々しく演出した直後の1995年秋頃から、ICMI（イスラーム知識人協会）と肩を並べる、他の四大宗教（カトリック、プロテスタント、仏教、ヒンドゥー）の知識人協会が次々と設立されたり、また、かつてのインドネシア国民党と同じアクロニウムを冠した新PNI（Persatuan Nasional Indonesia 10月26日設立）や、マシュミと同じアクロニウムの新マシュミなどが大衆組織（Organisasi Masa）というカテゴリーで設立された。これらは政党ではないし、政治活動は行わない、と政府は明言しているが、メンバーたちは強い政治志向をもっており、将来これらを政党へと発展させる希望を抱いているようである。現に、「エディトールの調査」によれば、全般的に政治には無関心な中で、調査対象者の三分の一が新政党の誕生を望んでいるということであった。1996年3月には発禁になった『テンポ』の元編集長グナワン・モハマッドを委員長とする独立選挙監視委員会が結成され、来年の選挙を政府とは別に独自に監視していこうという動きを見せているし、また5月には昨年開発統一党から除名され国会議員を免職になったスリ・ビンタン・パムカスが、政府の認可なしに「インドネシア統一民主党」を結成した。また7月1日には民主主義の崩壊を憂える政治家・知識人たちが「7月1日声明」を出し、危機感を訴えた。このように政府に対して挑戦的な動きもある一方で、6月には、政府が民主党の反主流派を支援して、急進的な党首メガワティ女史のひきおろしを容認するという事態が起これり、人々はいっそう政治変革に対して無気力になってきている。

(2) 開発のブループリント

そのようなファクターはあるものの、基本的には政府は中間層の政治的潜在力をさほど脅威と感じていないのではないかと思われる。ただし、国境を越えた外国文化の浸透、そしてまたどんどん加熱しつつある消費や贅沢なライフ・スタイル、インドネシア的価値観の侵食に対してはやはり危機感を感じていると思われる節がある。そもそも為政者たち自身が中間層の構成員であり、消費文化、豪華なライフ・スタイルの実践者であるため、一般には、それほど直接的には批判的、警告的な言動は出てこない。しかし、モラルと規律において、さらにまた国民統合上の問題から多少の危惧は感じているのではないだろうか。

このような新中間層の台頭に対するスハルト政権の対応を考察する前にまず、われわれが「開発」と訳しているプンバングナン (pembangunan) という言葉について考えてみよう。これは、bangung つまり、「建てる」「起きる」「目覚める」という意味の動詞から派生した抽象名詞で、「建設」というほどの意味である。政府の政策の柱となる用語を決定する際にたとえば、perkembangan (発展) や pertumbuhan (成長) などという用語を使うことも可能であったが、あえてこの「建設」ということばを充てたことに筆者は注目したい。当初筆者がこの言葉に関心を持ったのは、日本軍がインドネシアを占領中に、「大東亜の建設」という言葉の訳として使ったのが、この pembangunan という言葉だったからである。つまりインドネシアの国民にとっては、支配者日本が住民の動員のために使ったマニピュレーション、プロパガンダの用語と同じなのである。

「大東亜の建設」は必ずしも「経済開発」を念頭に入れた言葉ではなく、むしろ、社会全体を一定の方向へ築き上げていく、という意味合いのものであった。そして、スハルト体制下での pembangunan も実は本来そういった文化的な概念を含んだ言葉だったのである。従って、その副産物として出てきた新中間層の問題は、単なる経済成長という問題と結び付けるだけでは理解できないものがある。つまり、人間の思考、行動、価値観のすべてに係わる問題であり、そこには「建設」はかくありたいという為政者側の意図が反映されてしかるべきである。新体制が目指したトータルな「建設」のブループリントの中に、新中間層の台頭ということはどのように位置づけられていたのであろうか。当初「国民統合」と「貧困の撲滅」は大きな課題であったが、その達成過程で出現してきた新しい階層と、彼らの動向に対処するという問題もまた深刻な課題になっていったと思われる。すなわち、ますますこれから増えていくであろうこの社会層を、政府のコントロール下に今後も置き続け、彼らのコスモポリタン志向が国民統合の妨げにならぬよう善導していかねばならないのである。

(3) 「パンチャシラ」とモラルの向上

その際に、重要な役割を果たしたのが、パンチャシラ・モラルのさらなる徹底であった。最

近これに関する優れた研究を発表した高橋宗生は、スハルト体制は、パンチャシラを国民統合の柱とするための一連の政策を実施し、その結果独立宣言以後の20年間とは比較にならないほどの政治的安定と経済発展を達成することができた、と評価している〔高橋 1995:83〕。たとえば1973年には、小学校から高等学校に至るまで道徳教育を実施することが決定され、準備期間をへて1980年から本格的に実施されたが、これが強い国家観、インドネシア民族観を植えつけるのに効果があった〔同上書:67-68〕。インドネシア政府がこの道徳教育がいかに重要だと考えているかを示す一つのエピソードとして、1992年にパンチャシラ教育をしていない外国系の学校にインドネシア人子弟が就学することを禁止する、という問題がもちあがった。インドネシアでは、もともとインドネシア国籍の児童が国内において外国系の学校に入学することを禁止していたのだが、現実にはさまざまな理由をつけて一部の特権階級や外国人の母親を持つ子弟はインターナショナル・スクールに通う傾向があった。ところが1992年に突然、これに対する取締りが強化され、学校内に査察が入って多くの児童が転校を余儀なくされたり、あるいは上級学校への進学卒業を諦めさせられた。この事件の背景には、インターナショナル・スクールを真似て英語で教育を行う小中学校の建設を計画していたリップポー・グループの暗躍があったという説もあるが、筆者は、むしろインドネシア人子弟への「パンチャシラ」教育の徹底という側面でのこの事件を解釈している。

学校での道徳教育と並んで、大学生や公務員およびその家族に対しては「研修講座」が実施され、その論理の徹底がはかられた。さらに1983年にはすべての政党や組織はパンチャシラを唯一の組織原理（*asas tunggal*）として受入れなければならないという方針を打ち出し、イスラム関係者から多くの抵抗があったものの最終的にはこれを認めさせるに至った。

このように、一貫してパンチャシラの強化を通じて国民統合を進めてきたスハルト政権であるが、パンチャシラは村落共同体における価値観が基盤に据えられているので、この都市化の波の中で、どの程度都市型の人間関係に適應できるかが課題であると高橋宗生は述べている〔同上書:83〕。

そのような中で、パンチャシラを補足するものとして1995年度に独立50周年を前にして全国的に展開された国民規律（*disiplin*）強化運動がある、これは次期大統領候補の一人である大物政治家ハビビの懐刀であるワルディマン教育・文化大臣が中心となって推進したもので、具体的には、街角における外来語の氾濫を戒め、これらをインドネシア語化する運動として展開された。ビル、ショッピング・モール、学校、公園、病院などの名前に外国語を使っているものはすべてインドネシア語に変えるようにという通達が出されて、短期間のうちにかかなり徹底的に実施された。（例えばラトゥ・プラザは語順からして英語的だが、プラザ・ラトゥにすれば良いということで落ちついた例もある。）看板からネオンまで取り替えるのに莫大な費用を要したが、当局はこれを強要した。このインドネシア語化運動は、実は、郊外のある「リアル・

エステート」の名称があまりにも欧米的だということから始まったものであった。また、これと基本的に同じ意図から出たものと考えられるが、最近の民間テレビの番組においてあまりにも外国の番組が多いということに対する政治指導者たちからの批判がしばしば新聞紙上を賑わしている。

第三に、それほど大きな高まりにならずに消えてしまったが、国家機構・人材活用庁(BUMN)のシラライ(T. B. Silalahi)長官は、事有るごとに“Pola Hidup Sederhana (PHS)”(質素な生活)運動を提唱し、役人たちの贅沢な生活スタイルや冠婚葬祭のあり方に対して警告を発している。この「質素(sederhana)」という概念は、インドネシアではプラスの価値観を持つものであるが「金持ちにその富を使うな、というのは、銃を与えたが発砲するなというようなもので、酷である」という反論もあり、実際にはなかなか定着しない(*Jakarta Jakarta* No. 361 1993, pp. 16-17)。

こうして今や、中間層の台頭によって出現した新しいコスモポリタンな価値感や消費文化の蔓延は、これまでこの国が何にも増して心を配ってきた国民統合という観点から見ると、常に潜在的な危険要因を含んでいる問題だと思われる。かならずしもこの二つは正面から相反するものではないにしろ、政治的意識が薄く、金とステイタスの追求が一義的であるような中間層は、ともするとナショナル・センチメントも希薄な社会層であるかもしれないのである。「筋金入りの」ゴルカル支持者である官僚や軍人を柱としたかつての中間層から、民間セクターに中心を置く中間層へと質的な転換がみられる分だけ、国民統合への不安定要因は増したのではないかとも思われるのである。

しかし、インドネシア人が一般的にもつ強い国家への帰属意識は、たとえば、留学生や研修生の高い帰国率から見ても明らかに窺うことができる。国民としての意識はさほど簡単に崩れるものでもないであろうし、一方、画一的な都市文化をもった中間層は、ジャワ人だとかミナンカバウ人だとかいうような種族(suku)の隔たり、あるいはプリブミとノン・プリブミの隔たりを越えたグローバルなものであるから、これは国境を越えると同時に、国内のエスニックな障壁をも取り除くという考え方もできる。

(4) イスラームの振興

国民統合と安定に向けて中間層を方向づけていく上でもうひとつの対処策はイスラームの振興と中間層モスレムの体制内への取り込み、であった。

中村光男は開発とイスラーム化が社会変化の車の両輪として振興していることに注目し、開発体制下で出てきた新中間層はアイデンティティ、価値観、ライフ・スタイルの上で加速的にイスラーム化していると強調する。高学歴で専門的あるいは経営的なポストに就いた中間層がイスラームへの回帰を強めているというのである。そして、ジャカルタの新興高級住宅街に

はモスクや礼拝所の建設ラッシュが続き、たとえば、ポンドック・インダ地区では全館冷房のショッピング・モールに隣接して超現代スタイルのモスクが建設された。そして金曜の礼拝の後、このショッピング・モールは買い物客で非常な賑わいを見せており、中村はこれを経済的繁栄とイスラーム高揚の結合を象徴するものとして指摘している。

中村は、このようなイスラーム復興は、1960年に始まる国立イスラーム大学 (IAIN) の設立と1979年以降の飛躍的な学生数増加、1961年の大学における宗教教育の義務化、学校教育における宗教教育の普及などによって、インドネシア社会の全般的なサントリ化が進み、それが、開発の結果台頭した新中間層の一つの重要な属性として帰結をみたと解釈している。つまり彼はこれを、アバンガンがサントリ化していく現象としてとらえているのである [中村 1994]。

一方、アスワブ・マハシンはイスラームの復興を「サントリのプリアイ化」の結果であるとしている。彼によれば、このサントリ中間層はその視野やものの考え方において大きな変容を遂げ、プラグマティックで現状維持的、調和をより重んじ、急進性を欠き、伝統的イスラーム信徒集団の堅持に対してさほどファナティックでなくなってきており、社会で受け入れられやすいものになってきているという [Aswab Mahasin 1990]。

ヘフナーはこのようなプロセスで出現したモスLEMは、脱政治的な「文化的イスラーム」であることを強調し、彼らを政治的には中立で政府に支持された「ネオ・サントリ」と呼んでいる [Hefner 1993: 12]。新体制の初期において政府はモスLEM勢力に対してかなり政治的に厳しい態度をとった。たとえば、1970年代初めにはイスラム政党を体制に都合の良いように再編してしまったうえ、1980年代になると「アザス・トゥンガル」原則に基づいて、イスラーム政党を骨抜きにしてしまった [ibid.: 11]。こうしてイスラームは脱政治化し、その一方で、科学と進歩はイスラームと両立するとして [ibid.: 6] テクノロジーなどに重きをおく文化的な志向を強めていった。政府や大統領の財団によるモスク建設も進み、たとえば東ジャワでは、1973年に15,574軒であったモスクが1990年には25,655軒になったという [ibid.: 10]。

サントリのアバンガン化、ならびにアバンガンのサントリ化 (イスラーム回帰) の双方の側面があるにせよ、いずれの研究者も、このように文化志向で、合理的、知性的、かつ現代的な性格をもった新しいモスLEMの台頭の必然的な成り行きとして、1990年12月のインドネシア・モスLEM知識人協会 (ICIMI) の設立を解釈している。

筆者は、急激なグローバリゼーションと価値観の変容の中で、アイデンティティ・クライシスを感じた都市の新中間層が、その心のよりどころとして強くイスラーム回帰を希求したという側面はよく理解できるものの、現在これほどイスラームが体制を支える重要な課題となってきた背後には、現体制による意図的な力が働いているのではないかと考える。より具体的にいえば、イラン革命の影響を受け、イスラーム革命を目指す原理主義の浸透に対する不安 (現に1980年頃から84年にかけて、イスラーム急進派によるバンドゥン警察署襲撃事件、ガ

ルーダ航空機ハイジャック事件、タンジュン・プリオク事件、ジャカルタの華人系銀行爆破事件、ボロブドゥール遺跡爆破事件などが続いた)から、むしろイスラームをよりリベラルで知的な形に造形して、体制内に取り込んでいこうという意図が一方にあり、さらにコスモポリタン化しようとする中間層にイスラームを通じてインドネシア人としてのアイデンティティーを持たせることを体制の側からもあわせ狙ったものではないかと思えるのである。なぜ、1979年以降 IAIN の学生枠が急増したのか、なぜ、1983年に開発統一党がパンチャシラを党の唯一の組織原理(アザス・トゥンガル)として受け入れたのか、なぜ1990年に ICMI が大統領の腹心ハビビを長に祭り上げ、大統領みずからの臨席のもとに設立されたのか、を考えれば、イスラームの体制内への取り込みのプロセスは明瞭である。

ヘフナーは、ICMI 設立の経緯について詳細に述べており、その中でハビビが、このような組織の長に祭り上げられるに際して事前に大統領にお伺いをたて、「(このような組織に関与すれば) ババ(スハルト大統領)から引き離されてしまうのではないのでしょうか」と不安を表明したところ、大統領は即座に、「(このような組織を作ることは) いいことじゃないか。やりたまえ」と答えた、と述べている [ibid.:18]。イスラーム側が大統領側近のハビビを利用したのと同時に、政府側もこの組織を通じてイスラーム勢力への統制強化と勢力浸透を計ったのであった。

1995年8月の一連の独立50周年記念行事を見ていると、その中でイスラームが占める極めて戦略的な役割が目についた。たとえば、8月26日にスナヤン競技場でタブリック・アクバルという式典が行われ、その模様がテレビで全国に中継された。さらに10月には、ジャカルタ市の中心部にあるイスティカル寺院で第二回イスラーム博覧会が9月23日から2カ月間開催された。それらにはスハルト大統領みずから出席して開会を宣言している。さらに、同年7月17日のダーラン・フェスティバルの開会式でハルモコ情報相兼ゴルカル総裁が、自らダーラン(伝統的影絵劇で人形を操り語りをする人)を演じたが、その中でコーランの一節を間違えて発音したということに対し、イスラーム関係者の間からクレームがつき、8月末になって正式謝罪をするという事件があった。この事件は、次期大統領候補の一人として時折名前があがっていたこのジャーナリスト出身の政治家にとってかなり致命的なつまづきとなったのではないかと見られている。ゴルカル総裁がイスラーム勢力に対して陳謝するというのは極めて異常なことであり、そこにやはり、スハルト大統領のイスラームに対するかなり意図的な配慮を感じるものである。

いずれにしても現在中間層の間でかなり強いイスラームへの帰依がみられるのは確かである。金曜日には、東洋一を誇るジャカルタ市の中心部のイスティカル寺院の駐車場は高級車で一杯になる。一説によるとこれは1990年の ICMI の設立と1991年のスハルト大統領のメッカ巡礼以後のことであるという (Editor, 3 Feb. 1993)。また、毎月第一土曜日の夜にはイスティ

カル寺院でエグゼクティブのためのコーラン読経（pengajian）の学習会が開かれ、およそ100名が参加しているという。その中には軍の高級将校や政府高官も多いという [Suryansyah 1993:52]。また、街角をいく乗用車の窓に張られたステッカーの中にもイスラーム的な内容のものが目につく。¹¹⁾ さらに、一頃前までイスラーム音楽といえば、ダンドットが主流であったが、最近では、イスラーム・ポップ・ソングが流行りになってきているという [Rita and Johannes Simbolan Widiadana 1996]。また子供たちが気軽にイスラーム教育を受けられる場所として TPA (Taman Pendidikan Alchola) という全国的な規模をもった塾が開設され、「稽古事」のひとつとしてここへ通うという現象がみられる。こういったすべては、サントリたちを生み出している階層が大きく変化しつつあることを物語っているといえよう。

結 論

以上、開発政策の結果として台頭してきたインドネシアの都市中間層を、主としてそのライフ・スタイルと価値観から分析し、それがいかに、消費型であり、また国民国家の枠を越えたコスモポリタンな性格をもったものであったかを見てきた。今や失うべきものを持つようになった彼らは、ある程度の批判的姿勢を身につけているものの、政治的にはおおむね保守的で、民主化の原動力となりうるかどうかは疑わしい。一方、民族意識も希薄になりつつある。この国でプラスの価値をもった「質素（セデルハナ）」という概念からほど遠い、極めて贅沢な消費パターンをもった彼らに対する危惧を感じている政府は、「パンチャシラの強化」と「イスラームの体制内への取り込み」という二つの柱によって対処しようとしている。そういった中で、サントリとアバンガンの境界はますます曖昧になり、両者の要素をあわせもった新サントリ・中間層ともいうべきものが台頭し注目を集めている。このように1980年代後半からインドネシア社会は急速な変化を迎えつつある。新体制下でこれまで非常にたくみに維持してきた国民統合を、今後どのようにして確保しつづけるかは新しい課題であろう。

参 考 文 献

外国語文献

- Abdurrahman Wahid. 1990. Indonesia's Muslim Middle Class: An Imperative or Choice? In *The Politics of Middle Class Indonesia*, Monash Papers on Southeast Asia No. 19, edited by Richard Tanter and Kenneth Young, pp. 22-24. Center for Southeast Asian Studies.
- Ahmad Soerlawijaya; and Ardinan Taufuk. 1992. Kebangkitan Kelas Rewel dan Kenes? *Tempo*, 22 Agustus 1992: 42-43.

11) たとえば「良きモスレムであれ。さもなくば殉教者になれ」だとか「イスラームが解決策である」など (*Editor*, 13 Feb. 1993, p. 22)。

- Anonymous. 1993a. Maraknya 'Kelas Menengah' Islam. *Editor* 4(21), 13 Feb. 1993 : 22.
- _____. 1993b. Hidup Sederhana Slogan Doang ? *Jakarta Jakarta* 361, 5-11 Juni 1993 : 16-17.
- _____. 1995a. Mengejar Kelas Menengah dan Atas. *Warta Ekonomi*, 9 Jan. 1995.
- _____. 1995b. Mereka bicara soal Demokrasi. *Gatra*, 17 Juni 1995 : 26-27.
- _____. 1995c. Shopping Malls Turn into Recreation Sites. *Jakarta Post*, 19 Nov. 1995.
- Ardinan Taufik ; and Dwi Setyo Irawanto. 1992. Netral Membawa Suara. *Tempo*, 18 Juli 1992 : 26.
- Arief Budiman, ed. 1990. *State and Civil Society in Indonesia*. Clayton : Center for Southeast Asian Studies, Monash Univ.
- Ashadi Siregar. 1992. Iklan dan Marabat Kelas Menengah. *Editor* 4(41) : 48-49.
- Aswab Mahasin. 1990. The Santri Middle Class : An Insider's View. In *The Politics of Middle Class Indonesia*, Monash Papers on Southeast Asia No. 19, edited by Richard Tanter ; and Kenneth Young, pp. 138-144. Center for Southeast Asian Studies.
- Bekti Nugroho, 1993. Hunian dan Gemerlap : Perumahan mewah tetap laku meski ekonomi lesu. Seperti apa sih ? *Editor* 5(36), 5 Juni 1993 : 22-23.
- Chalmers, Ian. 1993. Democracy Constrained : The Emerging Political Culture of the Indonesian Middle Class. *Asian Studies Review* 17(1) : 50-57.
- Crouch, Harold. 1991. Aspirasi Kelas Menengah dan Islam harus lebih diperhatikan. *Editor* 5(17), 5 Jan. 1991 : 22-23.
- _____. 1993. Sejumlah Pendekatan untuk Memahami Hilangnya Kelas Menengah Indonesia Masa Orde Baru. In *Kelas Menengah Digugat*, pp. 75-104. Fikahat Aneska.
- Dick, Howard. 1985. The Rise of a Middle Class and the Changing Concept of Equity in Indonesia : An Interpretation. *Indonesia* 39 : 71-92. Cornell University, Southeast Asia Program.
- Fahmi Idris. 1995a. Kelas Menengah : Anak Kandung Kampung Kita. *Warta Ekonomi* 7(7), 10 Juli 1995.
- _____. 1995b. Eksektif Muda : Peran Mereka sebagai Kelas Menengah. *Warta Ekonomi* 7(10), 31 Juli 1995 : 44-45.
- Hefner, R. W. 1993. Islam, State and Civil Society ; ICMI and the Struggle for the Indonesian Middle Class. *Indonesia* 56 : 1-19.
- Hill, Hal, ed. 1994. *Indonesia's New Order : The Dynamics of Socio-Economic Transformation*. NSW : Allen & Unwin.
- Indonesia, Biro Pusat Statistik. 1994. *Statistik Indonesia*.
- Indonesia, Department Penerangan (Deppen). 1995. *Data Penerbitan Pers Nasional Tahun 1995*.
- John S. Nimpoeno. 1984. Mencari Golongan Menengah dan Perilakunya. *Prisma*, 2 Feb. 1984 : 49-54. (邦語訳「中間層とその行動様式」『インドネシアの政治社会変動と新中間層の擡頭——諸説の紹介と解説——』アジア経済研究所(編). 16-27ページ所収)
- Juwono Sudarsono. 1995. Kelas Menengah. *Gatra*, 17 Juni 1995 : 30.
- Kuntowijoyo. 1994. *Demokrasi dan Budaya Birokrasi*. Yogyakarta : Yayasan Bentang Budaya.
- Lev, Daniel. 1990a. Intermediate Classes and Change in Indonesia : Some Initial Reflections. In *The Politics of Middle Class Indonesia*, Monash Papers on Southeast Asia 19, edited by Richard Tanter and Kenneth Young, pp. 25-43. Center for Southeast Asian Studies.
- _____. 1990b. Note on the Middle Class and Change. In *The Politics of Middle Class Indonesia*, Monash Papers on Southeast Asia 19, edited by Richard Tanter and Kenneth Young, pp. 44-48. Center for Southeast Asian Studies.
- Liddle William. 1990a. The Middle Class and New Order Legitimacy : A Response to Dan Lev. In *The Politics of Middle Class Indonesia*, Monash Papers on Southeast Asia 19, edited by Richard Tanter and Kenneth Young, pp. 49-52. Center for Southeast Asian Studies.
- _____. 1990b. Indonesia is Indonesia. In *The Politics of Middle Class Indonesia*, Monash Papers on Southeast Asia 19, edited by Richard Tanter and Kenneth Young, pp. 53-58. Center for Southeast Asian Studies.
- Loekman Soetrisno. Pengeseran dalam Golongan Menengah di Indonesia. *Prisma*, 2 Feb. 1984 : 23-29.

- Mackie, J. A. C. 1884. Harta dan Kuasa dalam Masa Orde Baru. *Prisma*, 2 Feb. 1984: 30-46. (邦語訳「新秩序体制下の富と権力」『インドネシアの政治社会変動と新中間層の擡頭——諸説の紹介と解説——』アジア経済研究所(編). 43-69ページ所収)
- _____. 1990. Money and the Middle Class. In *The Politics of Middle Class Indonesia*, Monash Papers on Southeast Asia 19, edited by Richard Tanter and Kenneth Young, pp. 96-122. Center for Southeast Asian Studies.
- Mackie, J. A. C.; and MacIntyre, Andrew. 1994. Politics. In *Indonesia's New Order: The Dynamics of Socio-Economic Transformation*, edited by Hal Hill, pp. 1-53. NSW: Allen & Unwin.
- Masduki Baidlawi. 1993. Menengok Kampung-kampung Orang Kaya. *Editor* 4(36), 5 Juni 1993: 17-20.
- Natsir Kongah. 1993. Kendala Konsep 1-3-6. *Editor* 5(36), 5 Juni 1993: 21.
- Rita Widiadana; and Johannes Simbolon. 1996. Setting the Trend in Islamic Music. *Jakarta Post*, 4 Feb. 1996.
- Robison, Richard. 1990. Problems of An Analysing the Middle Class as a Political Force in Indonesia. In *The Politics of Middle Class Indonesia*, Monash Papers on Southeast Asia 19, edited by Richard Tanter and Kenneth Young, pp. 127-137. Center for Southeast Asian Studies.
- _____. 1995. Kelas Menengah Model Polandia. *Gatra*, 8 Juli 1995: 35.
- _____. 1996. The New Middle Class and the Bourgeoisie in Indonesia. In *The New Rich in Asia*, edited by Richard Robison and David S. G. Goodman, pp. 77-101. Routledge.
- Robison, Richard; and Goodman, David S. G. 1996. *The New Rich in Asia*. Routledge.
- Sarwono Kusumaatmadja. Jangan Ngomong Demokrasi dulu. *Gatra*, 6 Juli 1995: 34.
- Satjipto Rahardjo. 1993. Kerah-kerah Putih. *Tempo*, 26 Juni 1993: 98.
- Schwarz, Adam. 1994. *A Nation in Waiting: Indonesia in the 1990s*. NSW Austraria: Allen & Unwin.
- Sjahrir. 1995. Kelas Menengah Indonesia: Harapan dan Kenyataan. *Warta Ekonomi* 7(9), 24 Juli 1995: 8.
- Soegen Sarjadi. 1994. *Kaum Pinggiran Kelas Menengah Qua Vadis?* Jakarta: Gramedia.
- Soemarno. 1995. *Gerakan Disiplin Nasional 1995*. Jakarta: CV Mini Jaya Abadi.
- Sri Pudyastuti. 1992. Mereka Sibuk dan Menikmati. *Tempo*, 26 Desember 1992: 91.
- Sundhaussen, Ulf. 1992. Demoklasi dan Kelas Menengah: Refleksi mengenai Pembangunan Politik. *Prisma*, 2 Feb. 1992: 63-82.
- Suryansyah. 1993. Pengajian Para Eksekutif. *Editor* 5(44), 31 Juli 1993: 52.
- Tan, Melly. 1993. Yuppies & Yiffies. *Matra*, Oct. 1993: 40-41.
- Tanter, Richard; and Young, Kenneth, eds. 1990. *The Politics of Middle Class Indonesia*. Monash Papers on Southeast Asia No. 19. Center for Southeast Asian Studies.
- Taufik Abdulah. 1992. Kelas Menengah atau Borjuis? (Book Review on "The Politics of Middle Class Indonesia" by Richard Tanter; and Kenneth Young) *Tempo*, 22 Agustus 1992: 108.
- Wahjoetomo. 1995. *Membangun Kelas Menengah*. Jakarta: Gramedia and Malang: Universitas Merdeka.
- Widi Yarmanto; and Hidayat Gunadi. 1995. Yang lahir dari Birokrasi. *Gatra*, 17 Juni 1995: 28-29.
- The World in 1996*. 1996. London: The Economist.
- Yahya Muhaimin. 1984. Politic, Pengusaha Nasional dan Kelas Menengah Indonesia. *Prisma*, 3 March: 63-72. (邦語訳 1985. 「政府, 企業, そしてインドネシアの中間層」『インドネシアの政治社会変動と新中間層の擡頭——諸説の紹介と解説——』アジア経済研究所(編). 28-42ページ所収)
- Yohanes Sumadya Widada. 1993. Menyorot Perumahan Eksklusif. *Editor* 5(36), 5 Juni 1993: 18-20.
- Zulkarnain, Happy Bone; Faisal Siagian; and Laode Ida, eds. 1993. *Kelas Menengah Digugat*. Fikahat Aneska.
- Kompas* のアンケート調査
Professional Muda Jakarta Gaji Jutaan, Kerja Keras Kurang. *Kompas*, 11 Mei 1986.
- Editor* のアンケート調査
Kaum Gamang Yang Diam. *Editor* 3(49), 18 Agus. 1990: 12-25.

Forum Keadilan の特集号

Forum Keadilan (Edisi Khusus Kelas Menengah Indonesia). Tahun V, April 1996.

邦語文献

- アジア経済研究所 (編). 1985. 『インドネシアの政治社会変動と新中間層の擡頭——諸説の紹介と解説——』(所内資料).
- 浅見靖仁. 1995. 「中間層の成長とタイ政治社会論の新動向」『総合的地域研究』9: 16-22.
- クーパー・ジリー. 1979. 『クラス・イギリス人の階級』渡辺昇一 (訳). 東京: サンケイ出版.
- 倉沢愛子. 1996. 「『ドラえもん』VS 中産階級——インドネシアにおけるジャパニネーション」『ユリイカ』28(9) (特集ジャパニネーション): 107-111.
- 内藤 耕. 1994. 「インドネシア——現実優先の『衛星先進国』」『放送批評』1994年3月: 48-51.
- 中村光男. 1994. 「インドネシアにおける新中間層の形勢とイスラームの主流化——ムスリム知識人協会結成の社会的背景」『講座現代アジア3 民主化と経済発展』萩原宜之 (編), 272-306ページ所収. 東京: 東京大学出版会.
- 白石 隆. 1992. 『インドネシアの国家と政治』東京: リプロポート.
- 白石 隆; 加納啓良. 1995. 「政治と経済」『もっと知りたいインドネシア』東京: 弘文堂.
- 高橋宗生. 1995. 「国民統合とパンチャシラ」『現代インドネシアの政治と経済——スハルト政権の30年』安中章夫; 三平則夫 (編), 53-94ページ所収. 東京: アジア経済研究所.
- 安中章夫. 1995. 「スハルト『新秩序』体制再考——政治的近代化の軌跡——」『現代インドネシアの政治と経済——スハルト政権の30年』安中章夫; 三平則夫 (編), 23-52ページ所収. 東京: アジア経済研究所.
- 安中章夫; 三平則夫 (編). 1995. 『現代インドネシアの政治と経済——スハルト政権の30年』東京: アジア経済研究所.